

26

『方極』関連医籍による奥田謙蔵の古方研究

星野 卓之, 小田口 浩, 花輪 壽彦

北里大学東洋医学総合研究所

【緒言】

奥田謙蔵(1884-1961)は『皇漢医学要方解説』(昭和6年刊)において吉益東洞関連書籍,なかでも『方極』を引用し,その凡例では「方極に就ては,書中往々吉益東洞氏の説を誤伝せるものありと称せらる。依て今,方極刪定及び方極附言に拠り,其誤伝と認むべきものを訂正し,以て之を吉益氏の説と見做したり」と記している。その後昭和12-15年に『漢方と漢薬』誌で16回にわたって連載した「有終庵雑抄」で,自らが所蔵する稀な写本も含めた『方極』関連書籍からの引用を列挙したが,桂枝湯類のみで終了となった。昭和30年6月奥学会創刊の『古医学研究』に連載された「只仁堂雑抄」「主要薬方解説」では,『方極』所載方ごとに多くの医書からの引用を晩年まで続けた。近年,日本古典籍総合目録データベースにない稀観本を含め,奥田旧蔵書籍の一部が杏雨書屋の蔵するところとなった。

【方法】

杏雨書屋の奥田謙蔵・藤平健旧蔵書につき,奥田の経方研究に引用された書籍を調査した。特に『方極研究』(奥・藤508)の記載と,その前後の期間に連載された引用書目を比較検討した。

【結果】

「有終庵雑抄」の桂枝湯類17方は『方極』の記載順であったが,昭和31年2月号から連載が始まった「只仁堂雑抄」では桂枝去芍薬湯・桂枝二麻黄一湯・黄耆桂枝五物湯・黄耆芍薬桂枝苦酒湯が除かれ,桂枝湯・桂枝加桂湯・桂枝加芍薬大黄酒湯・括蕪桂枝湯・桂枝去桂加茯苓白朮湯が追加されていた。続いて『漢方古方要方解説』の方剂分類で五苓散類・麻黄湯類にあたる処方「主要薬方解説」で取り上げられ,最終回は昭和35年10月,45方目の葛根湯であった。ノート3冊からなる『方極研究』では昭和27年1月23日より昭和31年11月14日まで水曜の日付で『方極』所載方ごとに医書からの引用がなされていた。処方は桂枝加厚朴杏子湯から蛇床子散までの175方,引用書目は『方極解』『方極直解』『方極一味解』『方極国字解』『方極腹診解』『腹舌図解』『腹診配剂録』『古方便覧』『古方節義』に限られていた。そのうち『方極直解』『古方便覧』『古方節義』は「只仁堂雑抄」で取り上げられたが,後の連載では殆ど引用されなかった。『方極研究』になく連載で頻回に参照されたのは『方機』『方庸』『方極附言』『湖南子註釈方選』『医聖方格』『方極国字解』(『方極口訣』後修本)であった。『古医学研究』では漢文をわかりやすく意識しつつ『傷寒六経志』など『傷寒』『金匱』関連書を広く取り上げた結果,戦前からの連載における引用書目数は48に及んだ。

【考察】

『方極研究』は『方極』引用書目に限られ,必ず水曜の日付が付されていることから,門人等との定期的な会合に際して記載されたと推測される。本郷根津から市川市菅野への転居の際など多忙な時期に数ヶ月間の中断がありながらも4年以上かけて終了した経過が残されており,戦前・戦後と『方極』関連医籍を中心に研究を続けて方意に迫ろうとした過程が明らかとなった。『方極一味解』『方極国字解』など稀な医書について注目し続けたことも興味深い。その知見は『漢方古方要方解説』の改訂や『傷寒論講義』の草稿作成に役立てられたものと考えられる。

【結論】

奥田謙蔵の『方極』関連医籍を用いた経方研究の一端が明らかとなった。

(本発表は,公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋2018年度杏雨書屋研究奨励「吉益東洞『方極』関連書籍の研究」による研究成果の一部である)